

武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

見る／学ぶ／訪ねる／
武蔵国分寺跡資料館

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

【住所】〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
【電話】042-323-4103 【FAX】042-300-0091
【E-mail】museum@city.kokubunji.tokyo.jp
【HPアドレス】
http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html

2013.11
第16号



平成の国分寺造営 ー古代窯業の里 鳩山町との連携②ー

鳩山町（埼玉県比企郡）には、東日本最大級の古代の瓦窯跡である鳩山窯跡群があり、武蔵国分寺創建期の瓦の約8割が生産されたといわれています。鳩山町と国分寺市は「平成の国分寺造営」として連携して事業を進めており、前号では、鳩山窯跡群の概要と、8月31日に実施した「市外文化財めぐりー武蔵国分寺の瓦生産地をめぐり、古代瓦を作るー」の様子をご紹介しました。今号では、その後、市民が作った瓦が窯で焼かれ、鳩山町から国分寺へ運ばれてくるまでの様子をご紹介します。

1. 復元古代窯での焼成（窯入れ・窯出し）

鳩山町は平成24年度、窯跡の発掘調査成果をもとにその構造を復元した窯（部材は耐火レンガやコンクリートなど現代の材料）を農村公園内に設置しています。

8月31日に国分寺市民が作った瓦と、9月21日に鳩山町主催の瓦作り教室で作られた瓦（計約240枚）は、陰干し乾燥の後、この窯で、10月19日午前9時頃から20日午前7時頃にかけて焼成されました。作業は、鳩山町委託講師（陶芸の専門家）の指導のもと、鳩山町ボランティアを中心に、夜を徹して行われました。

実際に武蔵国分寺跡で出土する古代の瓦は灰色から茶色のものが主体ですが、昨年度初めてこの窯で焼かれた瓦は、それらに比べ黒みが強く、硬く焼き締まり過ぎていました。その原因として、窯の温度を上げ過ぎたことや、燃料に松（火力が強く長持ちし陶芸で一般的に用いられます）を使用したこと等が考えられます。その反省を踏まえ今回は、燃料には近辺の雑木（シラカシ、コナラ、クヌギなど）のみを用いることとし、温度は1時間に100度程度の上昇に抑え、最終的に1100度を超えないように薪の投入をコントロールすることとしました。

窯の焚口付近と焼成部奥には温度計が設置され、15分毎に2箇所の温度をグラフに記入していきます。グラフには、事前に設定した温度上昇の曲線が描いてあり、各時刻の温度がそれに近くなるよう薪の量や入れるタイミングを調整します。薪の投入後しばらくすると焚口付近の温度が上昇し、煙突からは黒い煙が立ち上ります。やがて焚口付近の温度上昇が緩やかになり、今度は奥の温度が上昇し始めます。温度が下がってきたら薪を投入し、経過を観察するという作業を繰り返し、夜明け過ぎに1000度を超えました。焚口の温度が1100度となった午前6時半頃、薪を投入した後に焚口と煙突を蓋で塞ぎ、耐火モルタルで窯の隙間を埋め、還元焼成（窯内部を酸素不足にして、一酸化炭素を発生させ粘土中成分と反応させる）の状態にして焼成作業を終えました。



焼成開始から約2時間半。温度はまだ200度台です。



夜を徹しての焼成作業が続きます。



翌朝、焚口と煙突を塞ぎ内部を還元状態にしました。

1週間後の10月27日、焚口の蓋を開け、窯の中の温度が下がったところで、瓦が取り出されました。気になる今回の出来具合ですが、若干硬い印象はあるものの、色に関してはかなり古代の瓦に近づきました。しかし、たたら（粘土の四角いかたまり）を作る段階での練りが足りなかったためか、割れてしまっている瓦が4割程みられました。枚数を作ることに気を取られ、基礎的な作業を軽視してしまったのだと思われます。次回は、これを教訓に、しっかりと丁寧に瓦を作り、焼成方法についても検討を重ね、色や質感などさらに古代の瓦に近づけるよう挑戦していきたいと考えています。



1週間後、焚口の蓋を開けて炭をかき出しました。



1点1点丁寧に取り出され並べられた瓦。国分寺への出発を待ちます。

2. 瓦の運上（鳩山町から国分寺市へ）

11月2日「はとやま祭」では、窯から取り出された瓦が展示され、瓦工人の衣装を身にまとった町民の皆さんによる瓦運上の出発式が行われました。



はとやま祭を出発する鳩山町の皆さん

11月4日の「国分寺まつり」では、例年行われている「歴史行列」に、鳩山町の瓦工人が参加しました。歴史行列の一行は、まず国分寺駅コンコースに並び、紹介を受けた後、まつり会場（都立武蔵国分寺公園）まで市内をパレードしました。そしてまつり会場中央のメインステージでは、瓦の引き渡し式が行われました。鳩山町長から「瓦運上事」と記された木簡が国分寺市長へ手渡され、続いて鳩山町教育長から国分寺市教育長へ、瓦長から造国分寺司、さらに瓦工から瓦作り教室に参加した国分寺市民の皆さんへと順番に瓦が引き渡されました。会場には、鳩山町を紹介するブースも設置され、展示された復元瓦に多くの市民が関心を寄せていました。

鳩山町で作られた瓦は、史跡武蔵国分寺跡の整備工事に使用されることとなっており、来年度も鳩山町での瓦作り体験教室を実施する予定です。多くの皆さんのご参加をお待ちしています。
(野中太久磨)



国分寺駅コンコースに並び歴史行列の一行



鳩山町長から国分寺市長へ手渡された木簡



瓦工（鳩山町民）から瓦作りに参加した国分寺市民へ瓦の引き渡し

企画展示



武蔵国分寺跡調査のあゆみと成果

— 僧寺金堂跡 —

- 開館時間 9:00～17:00 (入館は16:45まで)
- 期 間 平成25年10月26日(土)
～平成25年12月1日(日)
- 会 場 武蔵国分寺跡資料館
- 入 館 料 「おたかの道湧水園」への入園料が必要

武蔵国分寺跡は、天平13(741)年に聖武天皇による国分寺建立詔によって全国60余りの国に建立された奈良・平安時代を代表する地方の官立寺院です。江戸時代には、江戸近郊農村に所在する古代の寺院跡として著名な存在で、とりわけ巨石で配置された礎石と地表面に散布する瓦が地誌や史書で紹介されるなど、知識人の注目を集めていました。明治・大正期には、東京帝室博物館の重田定一や東京府により武蔵国分寺の礎石の配列や瓦が分布する場所が記録され、伽藍を構成する金堂・講堂・塔などの主要建物の配置が明らかとなり、さらに史跡として保護する事業にも着手されました。昭和31年から地下の遺構・遺物を確認する発掘調査が開始され、数次にわたり昨年度まで行われました。これらの調査成果により、諸国で造営された国分寺のなかでも最大級の規模と推定しています。

本年度の秋季展示では、僧寺金堂に焦点を当て、段階を経ながら調査内容を深化させてきた歴史を追いつつ、これまでの研究成果の概要を提示します。

僧寺金堂跡は、明治・大正期による礎石等の分布踏査、その後の昭和31(1956)年以来積み重ねられてきた発掘調査で、建物や基礎の位置・規模・構造等を知る調査が進められてきました。

その結果、総国分寺である奈良東大寺大仏殿や恭仁宮の大極殿を使用した山背国分僧寺金堂は別格ですが、武蔵国分僧寺金堂跡の大きさは全国国分寺の中でも最大級の規模を有し、それに相応しい建物基礎を築いていたことが判明しています。

まだ、解明して行かなければならない多くの課題がありますが、調査研究の進展とともに明らかにされてきました金堂の創建期以来の変遷状況や基礎構造の姿をご覧ください。

(中道 誠)

— 展示構成 —

江戸時代の様子と明治36年の調査 / 大正11年の国史跡指定 / 昭和31～40年の発掘調査の開始 / 史跡整備に伴う調査 / 鐘の規模



大正11年僧寺金堂跡 南東から
武蔵国分寺跡は大正11年に国史跡に指定され、これを受けて東京府は史跡保存の主旨を徹底させるため、寺域全般にわたる詳細な調査を行いました。



昭和31年発掘調査風景 北から
昭和31年9月2日に武蔵国分寺跡の本格的な発掘調査が初めて僧寺金堂跡にて行われました。



平成22年度史跡整備に伴う調査



「第9回国国分寺サミット in 2013 美作国分寺」開催

平成 25 年 10 月 12～13 日の両日、「第9回国国分寺サミット in2013 美作国分寺」が開催されました。全国国分寺サミットは、平成 12 年に豊前国分寺の福岡県豊津町（現みやこ町）長の発案で、国分寺の史跡という共通の地域文化資源を活用した街づくり、地域づくりについて活発な議論を行い、地域間の交流と人づくりを図ることを目的として発足し、今回で9回目を数えます。

国分寺市では、平成 21 年度の第7回サミットを開催しましたが、今年は美作国（みまさかのくに）が建国されて 1,300 年の節目を迎えることから、同国国分寺が所在する岡山県津山市が会場市となり、下野・武蔵・尾張・伊賀・山城・河内・備前・備中・筑前・豊前・豊後・大隅・美作国分寺のある全国 13 市町が参加しました。

大会初日は、開会式の後、第1部で「文化財を活かしたまちづくり」をテーマとしたパネルディスカッション、第2部で奈良文化財研究所名誉研究員の狩野久先生による「国分寺建立の意義」の記念講演会があり、最後に国分寺の史跡を末永く保護・継承し、生涯学習や地域交流の拠点として住民と協働しながら積極的に活用していく旨を謳った共同宣言が読み上げられました。パネルディ

スカッションでは、井澤邦夫国分寺市長から市の概況、武蔵国分寺の史跡指定・整備の進捗状況や展示施設等での公開・普及活動が報告され、他自治体との情報交換が活発に行われました。

二日目はエクスカッションで、津山城跡・津山郷土博物館・城東伝統的建造物群保存地区・津山洋学資料館・史跡美作国分寺跡・旧津山藩別邸庭園（衆楽園）等を視察しました。このうち、美作国分寺（僧寺）は、昭和 52～55 年と平成 12 年に行われた発掘調査の結果、2町四方の寺域を持ち、南から南門・中門・金堂・講堂が直線に並び、中門と金堂が回廊で結ばれる伽藍配置であることが判明しています。また、塔は回廊の南東部分の外側にあり、国分寺の存続時期は鎌倉時代までと考えられています。主要な遺構の保存状態は総じて良好で、平成 16 年 2 月には国の史跡指定を受け、翌 17 年度からは津山市が事業主体となって史跡公有化事業を実施しています（平成 28 年度完了目標）。

また、尼寺は僧寺の西側約 500m 付近にあり、付近の小字名「人神（にんじん）」は尼寺が訛ったものと言われていますが、詳細はよくわかっていません。

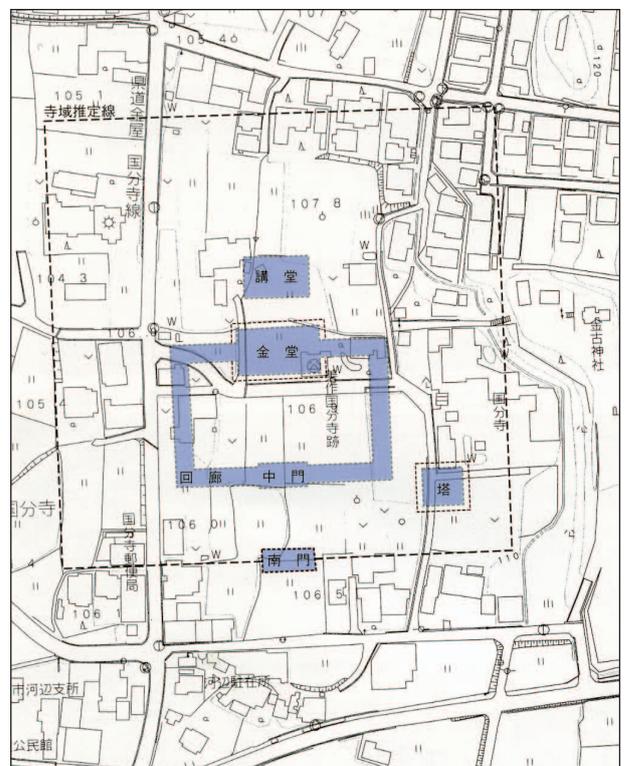
（島崎 進一）



パネルディスカッション（井澤邦夫国分寺市長）



国指定史跡 美作国分寺跡



史跡美作国分寺跡伽藍配置図（縮尺 1/6,000、上が北）

※津山市教育委員会 2005 『史跡美作国分寺跡 保存整備基本構想—保存管理計画と保存整備基本構想—』より抜粋

はじめに

幕末のペリー来航は内陸部の多摩郡の村々にも影響を与えました。ここで紹介する古文書は、外国艦船が江戸湾に深く進入することを防ぐために築造された御台場の普請に国分寺市域と周辺の村々が関わっていたことを示す史料です。まずペリー来航と御台場築造の経緯から見ていきます。

1. ペリー来航と品川御台場築造

アメリカ東インド艦隊司令官ペリーの二度にわたる来航は、これまで幕府が基本に据えてきた、強硬的または非協調的な外交方針を転換させて、嘉永7年（11月27日安政改元、1854）3月3日、日米和親条約の締結に至りました。老中阿部正弘は、欧米諸国との貿易を拡大して開港場を増加させる方針へと大きく舵を切る一方で、欧米列強の軍事力に対抗するため「富国強兵」への姿勢を強めて行きました。

ペリーが最初に来航したのは、嘉永6年（1853）6月3日で、4隻の軍艦を率いて江戸湾に入り、相模国浦賀（神奈川県横須賀市）に現れました。幕府は、交渉の場を相模国久里浜（神奈川県横須賀市）に設定して、アメリカ大統領フィルモアの国書を受領しましたが、ペリーは艦隊を江戸湾内に派遣して測量や航行による示威行為を行い、翌春の再来を予告して、6月12日には引き揚げて行きました。ペリーの滞在は10日間と短期間だったのですが、幕府が江戸湾で「黒船」に威嚇を受けたことへの衝撃は大きく、再来するペリー艦隊への具体的な対応策を立てるために、江戸湾沿岸部への外国船の接近や進入を妨げる海防を強化する方針を固めました。幕府は、老中水野忠邦の時代から西洋式砲術や台場（西洋式砲台のこと）築造などの海防に実績をあげてきた伊豆山代官江川英龍を起用して、江戸湾内に台場を築造する計画を策定させました。江川は、江戸湾防備の拠点として品川沖の海上に2列11基からなる品川御台場の築造を計画して、ペリーの軍艦が去って2か月後の8月下旬から第1～第3台場の築造に着手、翌嘉永7年7月に竣工しました。しかし、既にペリーは、同年1月16日に軍艦7隻で横須賀沖に再来しているため、3基の台場の完成は間に合いませんでした。品川御台場の築造は継続され、第1～第3台場築造中の嘉永7年3～4月に第4～第7台場の築造が着手されました。第4・第7台場の築造は途中で中止になり、第5・第6台場のみが同年12月に竣工し、海上ではなく陸続きの場所に設置された品川御

殿山下台場の築造が11月に開始されて12月に竣工して、全6基の台場が完成しました。全12基で計画した品川御台場築造は嘉永6年8月～安政元年12月までの約1年半の工期で打ち切りになり、計画の半数になる全6基（第1～第3・第5・第6・御殿山下）で築造が終わりました。次々と江戸湾内に入ってくる外国軍艦を牽制するためにも品川御台場の築造は急がれ、多くの物資や作業員の調達が急務となりました。江戸とその周辺地域の村々からの調達だけでは賄いきれないため、広く幕領の村々に品川御台場築造のための上納金や資材調達（木材・石材・土砂など）、その運送（船・馬）と作業員（人足）徴発などの負担が課せられました。

ペリー来航から品川御台場築造に至る一連の事件は、江戸湾を舞台にして展開しましたが、幕府は海防を実現させるために、江戸湾から離れた内陸部にあたる多摩郡の村々にも様々な負担を課したのでした。

2. 内海御台場御普請明儀取調帳の紹介

品川御台場の築造には、埋め立て用の土砂が大量に必要でした。土砂をそのまま海面に流し込むのではなく、中身が入っていない空の米俵（＝明儀 [あきだわら]）に土砂を詰め、土嚢の形にして海中に沈めました。このため短期間に大量の明儀が広範な地域で徴収されました。この明儀の徴収に関する史料を以下に紹介いたします。表紙に「嘉永六丑年 九月 内海御台場御普請明儀取調帳」と記載する横半帳の帳簿です（「内海」とは江戸湾のこと）。内容は、代官勝田次郎から府中領の府中3町と18か村に、明儀の取り集めを命じて納入するまでのやりとりを示した書類を写した帳簿です。帳簿の前半には、各村から取り集める「明儀」の数量計算を記し、後半には、5通の文書が書写されています（以下、5通の文書に便宜日付順で①～⑤のNoを付けて示します）。②③⑤には明儀に「棧俵付」と明記しており、俵の蓋になる「棧俵」（さんだわら）が付いていました。すぐに現地で俵の形に組める状態に準備して運送するためです。次に、①～⑤の文書を順番に見て、明儀の徴収から納品までの様子を紹介します。

①「覚」は、9月24日に代官勝田次郎から多摩領21か村宛に出された廻状です。廻状とは、宛先に指定された村々が順次に回覧板のようにして通達を継ぎ送りに伝達し、最後に受けた村から差出人に返して、全ての村々に通達が廻されたことを報告する形式の文書のことで

す。「内海台場御普請御入用二付其村々高百石二付明俵六十九俵ツ々取集上高輪町如来寺迄当月を限運送可相納候」として、品川御台場の第1～第3台場築造のために、村高100石につき69俵の割合で明俵を取り集めて、上高輪町如来寺に9月中に運送するように命じていました。取り集めの方法については、「当役所よりも出役之上最寄之村役人共之内世話方可申付候間右世話方之もの打合取集可申」とあって、代官勝田次郎の手附の田村順之助が多摩領まで出張して来て、21か村の取り集め作業を円滑に進行させる「世話方」を定めました。この「世話方之もの」は、納人惣代として②③④に連名の差出人で出ている府中宿名主彦兵衛と国分寺村名主良助で、取り集めてから上高輪如来寺に納品する責任者でした。取り集め作業と運送を早く行わせるため、「相当之代料運賃等をも御下ケニ可相成候間」として、明俵の代金と運送料を支払うとし、「明俵無之候与も此度者格別之御用之儀二付村役与相心得早々拵立可相納候」として、集められる明俵が不足して納入すべき数量に達しない時には、「村役」=水路や道路の普請と同じように村民が全員で作成に従事すべき役割と同様に考えて、早急に不足分を作成して納入するよう求めていました。但し、「酒造人其外穀類商ひ候もの又者水車稼等之ものより為差出其余不足之分拵立可申候」として、酒屋や穀物商・水車稼などを経営する富裕な者からまず調達し、その不足分を村民全員で作成して充足するよう指示していました。

別表(7頁)は、「嘉永六丑年 九月 内海御台場御普請明俵取調帳」の前半部分の記載を使用して、各村を1～21番に番号付されている通りに配列し、取り集める明俵の数量記載と駄数でまとめた一覧表に整理したものです。村高に応じて100石につき69俵で明俵の数量を算出して、合計7,785俵になることが解ります。収集・作成された多量の明俵は、馬に積んで陸路を上高輪町如来寺まで運送するため、60俵で1駄(1駄とは馬1頭に積載できる量のこと)とし、7,785俵を171駄と57俵に計算されています。最初に算出した明俵の数量は、村高100石につき70俵で計算して、合計7,901俵としていました。できるだけ早く多くの明俵を集めようとしていた様子が窺われます。

②9月27日、納人の府中宿名主彦兵衛と国分寺村名主良助から勝田次郎の手附田村順之助に出された「覚」では、明俵7,785俵の代銭145貫966文・駄賃103貫800文、合計249貫766文としていました。①では「相当之代料」を支払うとしていましたが、金額が高すぎるとして更に減額した代銭と駄賃になっていました。

③9月28日、府中宿名主彦兵衛と国分寺村名主良助が平内大隅(廷臣)に納入した際の代金請取「覚」には、明俵7,840俵、代銭(駄賃込み)251貫532文で記載し

てありました。

④9月28日、納人惣代府中宿名主彦兵衛と国分寺村名主良助から勝田次郎の手附田村順之助に出された「覚」では、③と同じ明俵7,840俵、代銭(駄賃込み)251貫532文の記載で、「高輪御台場御小屋」に28日の「朝四ツ時」(午前10時頃)に明俵の納入と代銭受取を済ませ、各村へ代銭の割り渡しを行うことを報告しました。

文書の日付からは、代官勝田次郎からの明俵を徴収する指示が9月24日(①)に出され、27日(②)に代銭を減額するための金額の再計算があり、28日朝(③)には運送先の上高輪町の如来寺に運ばれています。府中宿から高輪までは1日行程なので、3日間で明俵を作成・収集して納入する、急な様子が窺われます。

運送先に指定された如来寺の境内は、海上で築造中の台場の正面に位置していて、台場築造用資材の調達管理のための「高輪御台場御小屋」が設置され、代官齊藤嘉兵衛の手代で台場築造上納金の徴収・請取と管理に携わった田中第五郎と品川台場の第1～第3台場築造工事を落札して普請を実務担当した幕府作事方大棟梁平内廷臣(③)が詰めており、各地から運搬されてくる資材の受け取りと費用代金の支払いを行っていました。

また、納入した明俵を受け取るように田村順之助から田中第五郎へ進達した文書⑤「送り状」には明俵7,785俵と記載されていました。③④と⑤では、明俵数が食い違っていますが、⑤の7,785俵という数量は、村高100石につき69俵の割合で代官勝田から指示があった際の①と同量で、指示通りに納入したことを照合させるための数値だといえるでしょう。③④で平内廷臣に納入して代金を受け取った際の7,840俵・代銭251貫532文は、実際に納入した数量と受取代銭だったと見られ、明俵の納入数量が増えたので、その分代銭が②の金額よりも多くなっていました。

以上のような経緯で、明俵の取り集めから納入までを見てきました。同様の事例を他の地域でも見ることができそうですので、両者を比較してみようと思います。

3. 明俵の納入手続き

①「覚」と同様の廻状として荏原郡太子堂村の例を紹介いたします。齊藤嘉兵衛手代南条助一から荏原郡太子堂村の他6か村(いずれも世田谷区)に出された達です(以下引用箇所頭にAを表示します)。差出日付と文言が①「覚」とほぼ同様の文章になっていますが、部分的に違っている箇所を以下に抽出して紹介します。太子堂村では、A「村高百石二付百六七拾俵之当りを以取集来ル廿六日迄二高輪町如来寺境内江持参我等改之趣を以同役共江引渡可申候」と記載され、100石につき160～170俵くらいの割合で取り集め、26日までに高輪町如来寺

境内に持参して、南条たちの検査を受けて役人に引き渡すとしています。①「覚」とは違い、1村あたりの数量が多く設定され、持参の期日が指定されていました。①「覚」が100石につき69俵と太子堂村の半分の数量で「当月を限」としていたのは、上高輪如来寺からの距離が太子堂村よりも遠隔地で、武蔵野新田が畑方の土地柄で本来は明俵の取集めには適さない地域であることが考慮されたからでしょうか。また、A「元代料并運賃とも直二相渡し候管二付高当之外最寄私領より買集メ可成丈持参可致候」として、明俵が納入されると代銭と運賃が支払われるとし、明俵は規定の数量だけでなく近辺の幕領以外の領地からも購入して多くを集めるよう求めていました。国分寺村の①「覚」では、むしろ規定の数量の明俵が集まらないことが危惧され、富裕な者から多く調達するよう求めていました。Aには廻状を出した南条の検査を受けてから如来寺境内の「同役」に明俵を渡すと記載があります。A「同役」とは齊藤嘉兵衛の手代を指すので、南条助一と⑤に記載されている田中第五郎は「同役」であることが解り、Aで明俵を渡す相手とは、「同役」=田中第五郎になります。①「覚」とAを比較することで、④⑤の順序と同じ明俵の納入手続きであることが分かります。

国分寺村と太子堂村の2通の廻状の内容は、ほぼ同じですが、明俵徴収の期日指定や仕方に細かな違いが見られるのは、代官が支配地域から多量の明俵をどのようにして円滑に取り集めて納入することができるのか、その地域の実情に合わせて出来る限りの数量を集めようとし

たことが反映されていたと見る事ができます。

古文書を読むことで、ペリー来航や品川御台場築造が国分寺市域とその周辺の村々に様々な影響を与えていたことを具体的に知る事ができます。

【補注】

- 1) 「嘉永六丑年 九月 内海御台場御普請明俵取調帳」は、『国分寺市史料目録(1)』(昭和54年[1979]3月、国分寺市史編さん委員会)の29頁に所収する本多良雄家文書の(支配143)です。
- 2) 上高輪町如来寺は、現在の港区高輪の泉岳寺の隣地に所在していた天台宗寺院ですが、明治41年(1908)に大井町字金子(現在の品川区西大井五丁目)に移転し、大正12年(1923)に下谷(台東区)から同地に養玉院が合併して、現在の養玉院如来寺に至っています。
- 3) 本文を記述するにあたっては、平成23年度特別展図録『品川御台場—幕末期江戸湾防備の拠点—』(品川歴史館、平成23年[2011]10月)を参照し、同館学芸員富川武史氏より多くのご教示を得ました。記して感謝の意を表します。

(中元幸二)

別表 明俵の取り集め数量

	村名	現在の所属	村高	100石に 付69俵	村別(駄数)	
					駄数	余り
壹番	本町	府中市	1,371	946	15	46
二番	番場宿		979	676	11	16
三番	新宿		933	644	10	44
四番	屋敷分村		360	248	4	8
五番	本宿村		1,211	836	56	8
六番	是政村		925	638	10	38
七番	小田分村		107	74	1	14
八番	常久村		274	189	3	9
九番	上保屋村	西東京市	318	219	3	39
十番	下保屋村		398	275	4	35
拾壹番	車返村	府中市	537	371	6	11
拾貳番	国分寺村	国分寺市	391	270	4	30
拾参番	本多新田		151	104	1	44
拾肆番	貫井村	小金井市	461	318	5	18
拾伍番	恋ヶ窪村	国分寺市	284	196	3	16
拾六番	上小金井村	小金井市	265	183	3	3
拾七番	下小金井村		578	399	6	39
拾八番	鈴木新田	小平市	747	515	8	35
拾九番	梶野新田	小金井市	196	135	2	15
二拾番	下小金井新田		299	206	3	26
二拾壹番	境村 新田共	武蔵野市	497	343	5	43
合計			11,282	7,785	171	57

※駄数は、60俵を1駄として計算

市内文化財調査の報告（予告）

国分寺駅北口で再開発事業が実施されるのに伴い、明治20年頃からの歴史を持つ柳屋は、移転営業することとなりました。そこで、この建築物の解体と整理が始まる前に、教育委員会ふるさと文化財課が建築物、文書、民具の記録調査を行いました。その結果、かつての柳屋での旅館営業と中華料理屋、あるいは人力車営業やたばこの営業、国分寺駅構内の販売記録などが明らかになりつつあります。柳寿司があった建物の西側には明治37年に建てたとの墨書記録がある土蔵が残されていました。次号では、それらの成果の一部を報告します。



平成25年7月 柳寿司（本町4丁目に移転し、平成25年12月上旬に仮オープン、平成26年4月に本営業予定）

全国の国分寺瓦等を展示した他館展覧会の開催①



明治大学博物館にて、奈良時代初頭の東大寺・国分寺造営の実像と、国分寺が地方の寺院造営に与えた影響について、個人コレクション資料を軸に展示されます。

【展覧会名】明治大学博物館 前場幸治コレクション 特別展「天平の華 東大寺と国分寺」

【会場】明治大学博物館 地下1階 特別展示室（東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学アカデミーコモン地階）

【会期】2013年10月19日（土）～2013年12月12日（木）

【電話】03-3296-4448 【入館料】300円

全国の国分寺瓦等を展示した他館展覧会の開催②



旧新橋停車場 鉄道歴史展示室にて、当館保管の瓦が多数展示される予定です。展覧会では、国分寺の軒先を飾る文様瓦（鏡・宇瓦）の魅力が紹介されるとともに、全国の国分寺を巡り、古瓦を蒐集した当時の鉄道事情が紹介されます。

【展覧会名】「国分寺物語—全国の国分寺を巡る旅—」（仮題）

【会場】旧新橋停車場 鉄道歴史展示室（東京都港区東新橋1-5-3）

【会期】2013年12月10日（火）～2014年3月23日（日）

【電話】03-3572-1872 【入館料】無料

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内



- 交通のご案内 ※駐車場はありません
- 【電車】○JR国分寺駅下車／徒歩約20分 ○JR西国分寺駅下車／徒歩約15分
 - 【バス】○国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車／徒歩約8分
○国分寺駅南口より「京王バス」系統番号<寺83>・<寺85>乗車「泉町一丁目」下車／徒歩約8分

- 開館時間
午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
 - 休館日
毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）
年末年始（12月29日から1月3日まで）
※展示替えなどで臨時休館することがあります。
 - 入園料
資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。（入園券は史跡の駅で販売）
一般……………100円（年間パスポート1,000円）
中学生以下……無料
 - 【入園料の減免規則があります】
- 学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
 - 身体障害者及びその介護者が入園するとき〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
 - その他教育長が特別の理由があると認めるとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
- ※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。



モバイルホームページQRコード